

総務文教常任委員会では、7月6日、山形県舟形町立船形小学校と、山形県戸沢村の義務教育学校戸沢学園において以下のような管外視察を行いました。

山形県舟形町立船形小学校

舟形町は、山形県の北東部で最上郡の南端に位置し、南北に6.5 km、東西に27.4 kmと南北に狭く、人口約5,100人の町です。

私たちは、舟形町における「船形小学校の統合とその背景」、「船形小学校の教育目標」を中心に視察を行いました。

1. 船形小学校の統合とその背景について

- ・山形県舟形町は、1954（昭和29）年の町村合併により5小、学校5分校が設置されたが、その後、2校の統合と5分校の閉校により1988（昭和63）年には4小学校となった。
- ・中学校は1983（昭和58）年に3校あったうち2校が統合、1998（平成10）年にも2校が統合し、1中学校となった。また、3か所あった町立保育所も2008（平成20）年に統合し、1保育所となった。
- ・そのころから、小学校では複式学級が増え始め、1保育所→4小学校→1中学校という状況もあり、「子供たちの教育環境がこれで良いのか」という声が増え始め小学校4校統合への流れが進み、2012（平成24）年度に4校を閉校。2013（平成25）年度に新生舟形小学校が開校した。
- ・このような経緯の中、小学校が閉校する地区では地域の活動拠点が無くなり地域の活力が失われる等の反対意見もあったが、

- ① 子供たちの教育環境がこれで良いのか
- ② 地域に学校が無くなった時に、地域の中での学校の役割をどう補完するのか

等の相反する課題について議論を尽くし、乗り越えることで統合にこぎつけた。

2. 船形小学校の教育目標について

担任と少人数指導教員が緊密な連携を図りながら、舟形町のめざす子ども像に対応した教育目標である、「夢や希望を持ち共に学び合う 心豊かな子どもの育成」の達成にむけ、以下のような指導を行っている。

- ① 主体的・対話的で深い学びをめざします（確かな学力）
教科担任制の推進、授業と家庭学習の連動、図書・新聞等の活用
- ② 変化に対応し、社会で自立する力を育てます（自立する力）
主体性を育む場面の設定、ICTを活用した教育、様々な仕事を知る学習
- ③ 豊かな心と他とつながる力を育てます（豊かな心）
認めて育てる指導、読書の質と量の向上（一日10分の家読）
- ④ 地域に学び、地域を愛する心を育てます（愛郷心）
日本一の給食食育推進事業、「いつでもどこでも誰にでも」挨拶と会釈
- ⑤ 健康でたくましい心身を育てます（向上心）
新型コロナウイルス感染症対策の徹底、教科体育の充実

3. TT（チームティーチング）指導について

学力向上を目的に、教員資格を持った特別支援教育支援員を現在7名配置しており、より細やかな指導を行える体制をとっています。

複数の教員で授業を行い、個々の考えや定着度を細やかに把握しやすくなったことで、子どもたちの意見を取り上げやすくなり、子どもたちの学習意欲の向上にもつながってきており、結果として学級集団として分け隔てなく関わり合いながら落ち着いて生活することができ、学習に対する意欲が前面に見られるようになり、定着度も向上してきている。

以上のように、引き続き当町が取り組まなければならない学校統合や少人数教育について学ぶべきところの多い視察となりました。

山形県戸沢村立義務教育学校 戸沢学園について

山形県戸沢村は、山形県の北部・最上地方に位置し、東西は約 18km、南北に 23km の地域で、人口約 4,100 人、面積は 261.31 km² あり、山形県の約 3%にあたり、その 80% 以上を山林原野（大半が国有林野）が占め、農用地は 10%未満となっています。

私たちは、「義務教育学校の設立経緯」、「義務教育学校のメリットとデメリット」等を中心に視察を行いました。

1. 小中一貫教育校から義務教育学校とした経緯

戸沢学園の学区は、旧戸沢小学校、旧古口小学校、旧神田小学校、旧角川小学校の 4 地区から成っています。少子化の影響を受け、平成 25 年度 4 つの小学校を統合し戸沢小学校を開校、角川中学校と戸沢中学校を統合し戸沢中学校を開校しました。さらに平成 29 年度に山形県内初の校舎一体型小中一貫教育校としてスタートを切り、令和 3 年 4 月、小中一貫校から義務教育学校「戸沢学園」として開校した。

2. 小中一貫教育校・義務教育学校のメリットとデメリット

- ・小中9か年の目指す子ども像を意識した系統だった指導体制
資質・能力の育成で系統だったカリキュラム・マネジメントにより学年間での格差の解消ができる。※初等部6年生の理科・音楽・図工・英語は中等部教員が行う。
- ・全教職員での成長の見取りと成果と課題の共有化
学校教育のスタートの姿と9年後の姿を日常的に見る中で手立てを考えていく体制により、原点の姿と成長の先の姿を見る中で指導の在り方を考えることができる。
※職員間の一体感と協働意識の醸成
- ・デメリットは感じられない。

3. ICT 教育の環境整備

電子黒板・デジタル教科書・デジタル社会科副読本の活用・学習ソフトの活用
タブレットの活用（令和2年度～全児童生徒）

※転勤による職員の入れ替わりはあるが、ICT教育担当者が実践などをまとめた「ICT だより」を発行し、職員に周知している。

4. 学園と地域のかかわり方

戸沢村には共育活動団体(学校主導の地域団体ではなく、地域主導の学校を支える団体)がもともとあり、集落単位または旧小学校単位に現在も活動している。

地域の中で子どもが大人と一緒に活動をする姿は、なくなっていない。

共育活動団体を中心とした「地域主導の地区公民館を拠点とした通学合宿」が統合前から行われており、地域の子どもは地域で育てるという感覚は、地域の方々の中に残っている。

5. 戸沢村社会科副読本について

「冊子」から「CD・R」を経て「デジタルブック」によるペーパーレス化を目指すとともに、地域資源や歴史を分かりやすく整理した公開資料集として、大人も楽しみながら学べる「デジタルアーカイブス」を目指した。

また、学校のPCやタブレット端末からの該当学年の学習利用だけでなく、家庭への端末持ち帰りを想定し、家庭からのアクセスによる学習機会の拡大や外部(地域の大人を含む)からのアクセスによる「戸沢村」を知り、学ぶ機会の拡充に繋げる狙いもあった。

以上のように初等部高学年の教科担任制による専門性を生かした学習や、初中合同の集會行事の実施など、自己肯定感を高める人とのかかわりを重視した活動や「デジタルアーカイブス」を目指した社会科副読本の制作など、当町の教育行政にも直ちに参考となる視察となりました。